

# プレイスメント・テストと 学部中級日本語クラスに関する報告

奥野 由紀子・丸山 千歌・四方田 千恵

【キーワード】 学部新入留学生、プレイスメント・テスト、日本語中級、履修指導、国費留学生

## 0. はじめに

留学生センターは学部留学生の日本語教育の充実を目指し、2003年度から教養教育日本語科目の新設やそれに伴うプレイスメント・テストの開発に取り組んできた（小川・丸山2006、小川・丸山・奥野2004,2006）。今年度は、この取り組みを開始してから5年目にあたる。本稿はこの5年間の活動を振り返り、1. プレイスメント・テストの概要および結果・分析・改訂、2. 2007年度「日本語中級」カリキュラムの概要、3. 「日本語中級」履修学生への再テスト（以下、リテスト）の実施とその結果、4. 「日本語中級」改善への示唆、5. 成果と今後の方向性および課題、の5点について報告するものである。

## 1. プレイスメント・テストの概要および結果・分析・改訂

### 1-1 プレイスメント・テストの目的と概要

多様化の傾向が見られる本学の学部留学生の日本語力への対応策として、留学生センターは2004年度に教養教育科目日本語「日本語Ⅰ中級」を新設した。

2003年度以前は、学部留学生の日本語力は日本語能力試験Ⅰ級レベルを想定した、いわゆる上級レベルのみの開講であったため、特に入学時における日本語力の把握を必要としなかった。しかし、新たに中級レベルの科目を新設することにより、入学時の学部留学生の日本語力の把握と「日本語上級」「日本語中級」対象者の判別を目的としたプレイスメント・テスト

を実施する必要が生じたのである。

プレイスメント・テストは、2004年度の開発、2005年度の試行を踏まえ、2006年度から本格実施を行っている。概要は表1の通りで<sup>1</sup>、約1時間半を要する。テストは3種類で、文法・聴解は初級から上級までのレベル判定を、読解および漢字・語彙は中級から上級までのレベル判定を行うように設定している。

表1 プレイスメント・テストの概要

	目的	所要時間
文法・聴解	初級～上級のレベル判定	30分
読解	中級～上級のレベル判定	40分
漢字・語彙	中級～上級のレベル判定	20分

実施における留意点は小川・丸山・奥野（2006）に詳述されているが、簡単にまとめると

- ①実施日は、各学部のオリエンテーションと重ならないよう事前調整を行う
- ②前年度の全学教育部会にて、各学部に学部留学生新入生統一日本語プレイスメント・テストの実施に向けた協力要請を行う
- ③新入留学生に対しては、入学式前に送付される入学案内の資料の中に、統一日本語プレイスメント・テストのちらしを入れ、周知徹底を図る

である。このような形での実施は、試行を含めると本年度で3回実施したことになる。そこで本章は2005年度から2007年度までの3年分について以下、報告する。

## 1-2 実施と判定

まず、3回の実施について報告する（表2）。試行年である2005年度および本格実施1年目の2006年度は、オリエンテーション日が全学で2日設定されており、プレイスメント・テストは各学部のオリエンテーション開催状況に合わせて、2日に分けて実施した。2007年度はオリエンテーショ

ン日が全学で1日しか設けられていなかったため、自動的に1回で実施することとなった。各学部には、オリエンテーション時間の調整など協力を仰ぐこととなった。

受験者数で見ると、追加受験者数は本格実施の2006年度から0～1名に抑えることができています。入学時の統一プレースメント・テストは回数を重ねることで、学内での認知度が高まり、学部からの協力も得やすくなってきており、「統一」テストの実施体制が整ってきたことが窺える。

表2 実施状況 表内の数字は人

年度	実施日	当日受験者数 <sup>2</sup>	追加受験者数	合計
2005年度	4月6日、7日	60	3	63
2006年度	4月6日、7日	57	0	57
2007年度	4月6日	51	1	52

次に、判定結果を見る（表3）。各年度とも留学生センター日本語教育部門で判定会議を開催し<sup>3</sup>、文法、読解および漢字・語彙の合計点、各科目の得点状況、学習者背景と授業経験による日本語教育担当者の経験的知見などから判定を行った。また、小川・丸山・奥野（2004）において、学部で困難を覚えるであろう学生に口頭運用能力を測定するインタビュー（OPI）を行なった結果、中級と判定された学生は学部レベルで必要とされる、裏づけのある意見や仮説を論じたり、詳細な記述や説明を行なうために必要な段落や複段落を構成するには困難なレベルであることが明らかになった。授業内での観察からも、確かに口頭運用面において同様の傾向が示され、プレースメント・テストによる判定の妥当性が裏付けられた。

表3 判定結果 表内の数字は人、( )内は%、小数点二位以下四捨五入

年度	日本語中級 <sup>4</sup>	日本語中級・ 上級の境界	日本語上級	合計
2005年度	13 (20.6)	3 (4.8)	47 (74.6)	63名 (100)
2006年度	12 (20.1)	設定せず	45 (78.9)	57名 (100)
2007年度	10 (19.2)	設定せず	42 (80.8)	52名 (100)

2005年度は、中級科目<sup>5</sup>の指定履修者のほか、中級履修を促すレベルを設定した<sup>6</sup>が、2006年度以降はこれを設けていない。2005年度は中級履修を促すレベルを含めると新入学部留学生の約25%が、2006年度も約25%が「日本語中級」対象者と判定された。2007年度の「日本語中級」対象者は20%弱となった。3年度分のデータからは、新入学部留学生の4-5人に1人が中級レベルの日本語力で入学してきていることが明らかになり、学部レベルでの日本語中級科目の開講の必要性が改めて確認された。

さらに、各科目の履修対象者の内訳を見ると、表4の通りとなる。日本語上級履修対象者すなわち上級レベル判定者は、私費留学生の割合が高く、日本語中級履修対象者すなわち中級レベル判定者（日本語中級・上級の境界を含む）は、国費または政府派遣留学生の割合が圧倒的に高い。私費留学生は漢字圏からの留学生が多く、国費または政府派遣留学生は非漢字圏からの留学生が多いという学習者の背景の違いが判定結果に表れている。国費または政府派遣留学生の中では2-4割が上級レベルに判定され、6-8割が中級レベルに判定されている。

大学入試向けの試験として活用される試験の、日本語能力試験から日本留学試験への移行による影響が出た可能性も考えられるので、日本留学試験の分析・評価に目を配るとともに今後の動向に注意したい。

表4 各科目の受講対象者の内訳 表内の数字は人、( )内は%、小数点二位以下四捨五入

		私費留学生	国費または 政府派遣留学生 <sup>7</sup>	合計
レベル	2005年度	44 (93.6)	3 (6.4)	47 (100)
	2006年度	37 (86.0)	6 (14.0)	43 (100)
	2007年度	38 (90.5)	4 (9.5)	42 (100)
日本語中 級・上級の境 界	2005年度	3 (100.0)	0 (0)	3 (100)
	2006年度	0 (0)	0 (0)	0 (0)
	2007年度	0 (0)	0 (0)	0 (0)
日本語中級	2005年度	2 (15.4)	11 (86.6)	13 (100)
	2006年度	4 (33.3)	8 (66.7)	12 (100)
	2007年度	1 (10.0)	9 (90.0)	10 (100)

### 1-3 結果の分析

2章で説明があるが、プレイスメント・テストの判定結果は、新入留学生の日本語履修条件に影響を与える。そこで、日本語教育部門では、適切なテストの実施のために、プレイスメント・テストの結果を分析した<sup>8</sup>。具体的には、正答率と識別力からの項目分析を行った。この項目分析の方法は、日本語能力試験で採用されている分析方法で、正答率は「全受験者がその問題項目にどの程度正解できたのかという難易度」を示し、識別力は「受験者間の能力の違いを、その項目がどの程度明らかにできるか」を表す（日本語能力試験実施委員会ほか 2007：39-40）。特に識別力についてはある程度の母集団の数を必要とするため、データは3年度分をまとめて整理した。センターが実施しているプレイスメント・テストは非公開のため、各項目の結果の公表は本稿では控えるが、この結果に基づき、改訂作業を進めている。困難度は全問題項目が4肢選択形式の場合、「困難度が0.25を下回る場合、その設問に何らかの問題がある可能性がある」（日本語能力試験実施委員会ほか 2004：183）が、中級と上級の判定を目的として開発した読解と漢字・語彙には、これに該当する項目がなかったことに言及しておく<sup>9</sup>。

また、中級と上級を判別するためのボーダーラインについても検証を行った結果、3年分の集積データを用いた計算で得られたボーダーラインと、各年度の判定会議が結論として出したボーダーラインは、ほぼ一致しており、各年度で下した判定結果の妥当性が確認された。

さらに、科目毎の相関は表5の通りであった。

表5 科目毎の相関

	聴解	文法	語彙
文法	0.315		
漢字・語彙	0.302	0.815	
読解	0.300	0.707	0.754

文法と漢字・語彙、および読解は強い相関があり、聴解は各科目と弱い相関があった(田中ほか 1992:188)。すなわち、中級レベル判定者は、文法力および漢字・語彙の力・読解力を伸ばしていく必要があるということがわかる。ここには、個々の技能別のニーズに考慮した科目の設置とともに、読解活動のような総合的な技能を向上させる科目を設置する必要があるというコースデザインへの示唆がある。

#### 1-4 改訂に向けて

留学生センターは、学部新入留学生の日本語力の適切な判定を継続的に実現するため、前節のテスト分析の結果を踏まえ、2008年度の新問題でのプレイスメント・テストの実施を目指して、2007年度中に改訂作業を行った。実施計画は、2005～2007年度の実施要領(小川・丸山・奥野 2006:59)とほぼ同じスケジュールで進めた<sup>10</sup>。

## 2. 2007年度「日本語中級」カリキュラムの概要

### 2-1 開講科目数

2007年度、留学生センターでは教養教育「外国人留学生のための授業科目」として日本語科目19科目、日本事情科目6科目を開講した。19科目の日

本語科目の内訳は実習科目14科目（「日本語中級」6科目、「日本語上級」8科目）、演習科目（「日本語演習」）3科目、および2005年度以前入学者のための「日本語Ⅱ」2科目となっている。

「日本語中級」6科目の開講は2004年度の「日本語中級」の開講以来変化はない。ただ、2007年度は教養教育カリキュラム改革の移行期間に当たるため新旧カリキュラムを並置させなければならないこと、さらには非常勤講師20%削減計画によって2004年度に比べると留学生センター全体の開講科目数が減少していることを考え合わせれば、十分に手厚い措置であると言える。

## 2-2 カリキュラム

過去2年の経験から6科目全部を履修できる学生は非常に少ないことが予測されたため、2006年度より学生が各自のニーズに合わせて適宜組み合わせさせて履修できるよう、6科目をそれぞれ独立したクラスとしている。独立性を強化するため、共通テキストは使用しないこととした。各科目の内容については、プレイスメント・テストで中級と判定された学部留学生が、学部生活を送る上で必要と考えられる技能を中心に、重なりを避けるような形で連携を取りつつデザインした。

その内容を技能別にまとめると以下の通りである<sup>11</sup>。◎は特に重視する技能、○は重視する技能を示す。

表6 2007年度日本語中級カリキュラム技能別重点

	読む	聞く	話す	書く	漢字	文法
日本語中級A	○		◎			
日本語中級B		◎		○		
日本語中級C	◎		○			
日本語中級D	◎					○
日本語中級E					◎	
日本語中級F		○		◎		

上記の表で明らかなように、各技能のバランスに考慮しながらも、「読む」

にやや重きを置いたのは、前述のように、日本語中級者には国費留学生を中心とした非漢字圏の学生が多く、読解力の弱さがプレイスメント・テストの結果にも影響していると考えられるからである。また、同様の理由から、2007年度には「日本語中級」としては初めて漢字クラスを開講した。

以上のカリキュラムがどのような効果を挙げたかということについては3において後述する。

### 2-3 履修状況について

前述のように、2007年度の日本語プレイスメント・テストで中級と判定された学生は10名であった。この10名の学生の日本語中級科目の履修状況をまとめると以下の通りである。

表7 2007年度「日本語中級」履修状況一覧

学生	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
学部	教育	経済	経済	経済	経営	経営	経営	工学	工学	工学
履修科目数	2	3	4	2	4	4	4	2	3	1
A	○					○	○	○	○	
B	○		○	○			○	○	○	○
C		○	○	○	○	○				
D					○	○	○		○	
E		○	○		○					
F		○	○		○	○	○			

2005年度の報告書（小川・丸山・奥野2006）では、

- ① 3コマ以上履修できる学生がいない（平均履修コマ数2.3）。
- ② 履修がゼロの学生がいる。
- ③ 曜日や時間によっては学部生の受講が少ない<sup>12</sup>

の3点が履修上の問題として指摘されている。



この3点に関して2007年度を比較してみると①平均履修コマ数は2.9であり、かつ4コマ以上履修の学生が3名存在する。②履修がゼロの学生はいない。と、若干履修状況が改善されていることがわかる。

その要因としては、「日本語中級」の開講も4年目となり、その意義が学生にも学部にも周知されてきたこと。特に2006年度の教養教育改革以降、経営学部では中級判定を受けた学生に対しては必修外国語単位に加えて「日本語中級」4単位の履修を義務付けたことなどが挙げられよう<sup>13</sup>。

また③の反省を受け、2007年度は2006年度中に経営学部の全学教育部会委員の協力を仰いで、専門等の必修が入らず比較的日本語が履修しやすい時間帯を調査し、その時間帯（月曜3、4限）に「日本語中級」AおよびFを開講した<sup>14</sup>。さらには教養教育科目開設時間帯である木曜4限にも「日本語中級」Dを開講した。こうした地味な努力の結果が上記の改善につながったものと考えられる<sup>15</sup>。

開講時間帯に関しては教室の割り振りや担当者の出講日などさまざまな要素を考慮せねばならず、必ずしも「日本語中級」だけを優先して決めることはできないが、今後も努力を続けていきたい。

なお、1で前述したように中級レベル判定者は、国費または政府派遣留学生の割合が圧倒的に高いことを考えれば、中級者対策は国費留学生対策としての一面も大きいことがわかる。年齢も若く、日本語力においてもハンディを抱えている国費留学生をケアできる少人数クラスの存在は、入学直後の生活指導上の観点からも意義が大きいと言えるであろう<sup>16</sup>。

### 3. 「日本語中級」履修学生へのリテスト

#### 3-1 リテストの目的と実施要領

今年度初の試みとして、前期終了時にリテストを行った。これは、「日本語中級」を履修したことによる効果は、授業担当実施者にとっては授業を通して実感し得るものであるが、それとは別に「日本語中級」履修学生の日本語力の伸びの一端をデータによっても明らかにするためである。また、学生にとっても目に見える形で提示しやすいため、今後の学習の指針材料の一つとして有効であると考えた。

リテストの内容は、プレイスメント・テストの点数との差を比較するため、

基本的にプレイズメント・テストと同様としたが、聴解についてはプレイズメント時にほぼ全員が上級レベルに到達していたため、省略した。また、繰り返しの効果を出るだけ押さえるため、プレイズメント・テストの問題を、カテゴリーごとにランダムに並べ替えて提示した。学生には、リテストの目的を説明し、可能な日程を調査して2日間設定し、「日本語中級」授業後実施した。

### 3-2 リテスト結果

以下にプレイズメント・テスト時の上級合格ボーダーラインとの差と共に、リテストの結果を、プレイズメント・テストとの比較（点数差）により提示する。

表8 プレイズメント・テスト(PT)との比較によるリテスト(RT)結果

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
4月時点でのPT合格ラインとの差*	-26	±0	+5	+7	-9	±0	-5	-17	-6	-4
PTとRTとの合計点差**	+11	+3	+4	+6	+15	+9	+2	+13	+3	+9
文法	-1	-1	+1	+7	+4	+8	+2	+7	+1	+3
語彙	+9	+1	+3	±0	+6	+5	-4	+2	+2	+5
読解	+3	+3	±0	-1	+5	-4	+4	+4	±0	+1

\*「中級」の判定は合格点以下もしくは、6割未満の科目がある場合と規定しているため、合計点としては合格ラインを超えている場合もある。またこの点数は「聴解」「文法」「漢字・語彙」「読解」の合計点である。

\*\*PTの「聴解」点を抜いた合計点とRT合計点との差。

この表によると、まず総合得点は全員伸びたことが挙げられる。これは、「日本語中級」を履修し、前期1学期を終えたことによる効果があったことがデータによっても支持されたものと言えよう。また、リテストでは「聴解」を実施していないため明確な言及は避けなければならないが、合格ラインを10名中7名（学生2,3,4,5,6,7,10）は超えたと想定される。この結果

は学生に自信を与え、来年度以降の日本語中級履修者への目標や動機に結びつけられるものと思われる。しかしながら、各カテゴリーでは個人によって、プレイズメント・テストと比較して、伸びていない箇所や下がった箇所があることも明らかとなり、この点に関しては、学生に今後の学習で強化すべき点として、学習法とともにアドバイスをを行った。

また、学生には、「文法」については、日本能力検定試験の1級、2級、3級というレベルに相当するカテゴリー別に結果を示した。このような詳細な結果は、上のレベルの文法が弱いのか、基本レベルの文法が弱いのが明らかとなり、学生に自分自身の課題を明示的に意識させ、今後の学習の参考として提示するのに有効であると考えたためである。というのは、中級レベルに判定される新入留学生には漢字圏からの私費留学生が毎年数名含まれているが、特に漢字圏で中級レベル判定者については、基本レベルの文法能力が身に付いておらず、読解などを漢字力で乗り切ろうとするものの正確な情報の受発信につながらないという深刻なケースが観察されることもあったことが挙げられる。また、実際にこの結果を見た文法の基本レベルが低かった学生からは、初級レベルは自学で行なったため納得できるとの反応もあり、基本レベルの文法の復習の必要性を自覚したようであった。

### 3-3 リテスト結果に基づく学生への履修指導

リテスト実施の目的の一つは、学生へのフィードバックおよびその後の履修指導を行うことであった。「中級日本語」は1年次前期に開講されるコースであり、後期から「上級日本語」を履修するためにも、その間の夏期休暇の過ごし方は中級履修者にとっては大変重要な意味を持つからである。

7月末、学生全員に個人面談方式で、口頭での今学期の評価と今後の学習方法についてアドバイスがなされ、紙面においても、1. プレイズメント・テストとリテストの結果、2. プレイズメント・テスト・リテストに基づくコメント、3. 受講クラス成績<sup>17</sup>、4. 受講クラスからのコメント・アドバイス、を記載した「中級日本語の成績とコメント」が手渡された。「2. プレイズメント・テスト・リテストに基づくコメント」では、結果をもとに伸びた点と今後の課題、学習法などが説明され、夏期補講や後期の授業

についての履修指導がなされた。また、「4. 受講クラスからのコメント・アドバイス」では、各クラス担当者から、今学期の評価や今後の課題、学習方法がより具体的に示された。

また、夏期休暇中の課題として1級文法問題を全員に渡した。さらに「上級日本語」への橋渡しの位置づけとして、後期が始まる前1週間を使った夏期補講を、中級日本語担当講師により開講し、特にリテストにおいても4月時のPT合格ラインに達しなかった学生に対しては、授業内及び、面談においてその受講を強く勧めた。これら、課題の実施と補講の受講については任意であり、成績等に関与する性格のものではないが、このような夏期休暇中のケアを通して、大学入学後初めて過ごす夏期休暇中の学習支援を行うことは意義あることと考えられる。

#### 4. 「日本語中級」改善への示唆

前述のように、リテストの結果によりその効果がある程度は裏付けられた「日本語中級」であるが、今後の更なる改善のための方向性を学生の声および担当者の観察から探してみたい。

まず、学生からは面談等を通じて以下のような感想や意見が聞かれた。

- ・ 予備教育時代よりも真面目に勉強できた。真面目に取り組んだら、楽しかった。
- ・ 一応上級までは勉強してきたので、復習になると思ったが、意外に新しく勉強することが多く、ためになった。
- ・ 4時間履修しても、苦痛やストレスを感じたことはなかった。
- ・ 先輩から、中級クラスは楽しくていい成績がもらえるという情報を事前に得ていたがそのとおりだと思う。
- ・ 文法のクラスがほしい
- ・ 日本人のクラスメイトとうまくコミュニケーションするための授業もほしい。

次に4人の担当者に共通する意見としては1. 学生は、中級とプレイスされたことが刺激となり、学部の授業についていける上級レベルに達する、という明確な学習目標を持たた。2. 教師は、少人数クラスで、きめ細か

い指導が可能となり、学習面に限らず、精神面でのサポートもできた。という2点を挙げるができる<sup>18</sup>。

「日本語中級」の開設において特に憂慮された点は、中級とプレイスされたことが受講生の学習意欲の喪失に繋がるのではないか、ということであった。それを防ぐための方策としては、各クラス内での指導に加え、プレイスメント・テストの結果発表と同時に中級者向けの特別ガイダンスおよび個別履修指導を行い、各科目の内容・目的について懇切丁寧に説明すると同時に、少人数クラスの効果を強調し、受講生の学習動機が高まるよう努めた。結果的に、前述のように学生からは、低くプレイスされて悔しい等の否定的な意見が聞かれず、中級クラスへの出席を肯定的に受け止めていただけではなく、1. で指摘したような明確な学習動機へと繋がったことは幸いであった。

また、2. の少人数クラスによるきめ細かい指導が、日本語学習において効果を発揮しただけではなく、入学直後の精神的不安の軽減に繋がったことも、学生たちに肯定的に受け止められたのではないかと思われる。日本語教育部門と生活指導部門が併設されている留学生センターの特色を生かし、精神的サポートという側面からも「日本語中級」のあり方を模索していく必要があるであろう。

また、カリキュラムに関する意見として、文法クラスの設置に関する要望が複数名から出されているが、これは、プレイスメント・テスト及びリテストでは「文法」にかなりの比重を置いて測定する一方で、「文法」だけを特化したカリキュラムが用意されていないことの反映であろう。今後、カリキュラムの中でどう取り上げるべきかを考えると共に、自律的な授業外学習<sup>19</sup>支援を通して、各自の課題を克服する方法を探りたい。また、日本人のクラスメートとうまくコミュニケーションする方法が知りたいというのも、留学生ならではの切実な要望であり、今後日本人学生、先輩留学生によるチューターやTA制度の活用も視野にいれつつ、講義に必要な日本語だけではなく、大学生生活全般に必要な日本語についてもケアできるよう工夫を重ねたい。

「中級日本語」の特色である少人数クラスによるきめ細かい指導をより徹底、拡充させていくことが今後の課題である。

## 5. 成果と今後の方向性および課題

以上、プレイスメント・テストと日本語中級科目の成果と課題を報告してきた。以下、これまでの成果と今後の課題について述べ、まとめをしたい。

まず、2004年度より教養教育科目日本語として新設された中級者対象の日本語科目について、今回のプレイスメント・テストの分析により、適切なレベル配置が行われてきたことが確認できた。また、プレイスメント・テストの結果に基づいた履修指導により日本語中級を受講した学生については、入学後すぐに上級レベルを履修したのでは達成できなかったであろう、日本語力の向上を認めることができ、学部レベルにおける中級日本語の意義と成果の検証が行えたと言える。

大学教育にあっても、教授言語としても生活言語としても重要な役割を担う日本語について、学習者のニーズに合った教育が充実しつつあるのは、各学部の理解と協力を得やすくなった背景がある。

この一方でひきつづき課題となっており、今後も各学部の協力を必要とするのは、日本語中級履修状況の改善である。プレイスメント・テストの分析結果からも明らかになったように、文法力と漢字・語彙力、読解力には強い相関がある。すなわち、特に中級判定者については、日本語中級が開講されている1年1学期目に、集中して日本語科目を履修し、日本語力を上級レベルにまで高める必要がある。第2章で履修状況に若干の改善が見られたという報告があるものの、週1-2科目の履修にとどまる学生も散見する。履修科目数が少ないということは、数だけの問題ではなく、必要な技能を学習しない、ということをも意味する。引き続き学部との連携を強化し、履修しやすい開講時間帯の把握に努め、中級判定者の履修状況を改善していきたい。

また、中級判定者への学習指導の改善について考えると、4章で言及があったように、今後は授業内容を授業時間内での指導のみに焦点を当てるのではなく、自律学習につながる授業方法の開発を視野に入れていくことが考えられよう。日本語能力試験1級取得を奨励するというのも一つの方法となるであろう。

さらには、中級者の学習状況を「日本語上級」「日本事情」担当教員と

共有し、その後の伸びを全員体制で見守る必要がある。今後、個人別日本語カルテ作成などの方法も検討したい。

プレイスメント・テストの項目分析の観点から見ると、本稿では各項目の報告は、テストの非公開という性質上行わなかったが、分析を通して上級判定者にも見られる文法上の課題が観察された。このような形でデータの蓄積と分析を繰り返すことにより、教育内容の改善につなげることが可能となるであろう。この点においても、プレイスメント・テストの分析は意義を確かめることができた。

留学生センターとしては、将来国内外のあらゆる分野において重要な役割を担う人材育成の一貫として、日本語教育支援に今後も積極的に取り組んでいきたい。

## 参考文献

- 小川誉子美・丸山千歌 (2006) 「日本語教育の現状と課題—学部留学生対象の日本語教育を中心に」『留学交流』vol.18 no.3 ぎょうせい pp.2-5.
- 小川誉子美・丸山千歌・奥野由紀子 (2004) 「学部留学生の日本語力に関する報告—中級者に対する試みと提案」『横浜国立大学留学生センター紀要』第11号pp.31-45.
- 小川誉子美・丸山千歌・奥野由紀子 (2006) 「学部留学生に対する日本語教育改革試案—プレイスメント・テストの試行と中級クラスの報告—」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』第13号 pp.55-67.
- 田中敏・山際勇一郎 (1992) 『新訂 ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法』教育出版.
- 日本語能力試験実施委員会・日本語能力試験企画小委員会監修 (2004) 『平成14年度日本語能力試験 分析評価に関する報告書』国際交流基金・日本国際教育支援協会.
- 日本語能力試験実施委員会・日本語能力試験企画小委員会監修 (2007) 『平成16年度日本語能力試験 分析評価に関する報告書』国際交流基金・日本国際教育支援協会.

## 注

- <sup>1</sup> 小川・丸山・奥野（2006）の報告に基づく。なお、今回の報告書は2007年度「日本語中級」授業担当者および教務委員の共同執筆（50音順）によるものである。
- <sup>2</sup> この統一プレイスメント・テストは短期交換留学プログラム参加生などが受験するケースがあるが、本稿の当日受験者数には、学部正規留学生以外の数を含めない。
- <sup>3</sup> 試験監督協力を得た清水知子非常勤講師も出席した。
- <sup>4</sup> 2005年度については「日本語I中級」。以下、「日本語中級」に言及する場合、2005年度入学については、「日本語I中級」を指す。
- <sup>5</sup> 横浜国立大学では2006年度に全学的規模での教養教育改革を実施した。教養教育改革以前の旧カリキュラムにおける科目名は「日本語I中級」、改革後は「日本語中級」と改称した。教養教育改革についての詳細は大学教育総合センター全学教育部会『2006教養教育の抜本改革について—横浜国立大学における教養教育のグランドデザイン—報告書』2004.12参照。
- <sup>6</sup> 対象となった3名のうち2名が「日本語I中級」を履修した。2006年度の教養改革実施以降は、プレイスメント・テストの判定結果の日本語履修条件への影響を鑑み、判定ガイドラインを明確にすることで、「日本語中級・上級の境界」というグレーゾーンを設定しないこととした。
- <sup>7</sup> 国費または政府派遣留学生のカテゴリーには、東京外国語大学および大阪外国語大学の予備教育修了生、マレーシア政府派遣学生、日韓共同理工系学部留学生プログラム修了生が含まれる。
- <sup>8</sup> データの分析にあたっては、特に阿部亮介氏（環境情報学府大学院生）の協力を得た。ここに記して謝意を表す。
- <sup>9</sup> 聴解・文法は、初級から上級までの判定を目的として開発したテストであり、今回の受験対象者が中級以上の学習者であることから、この方法



での分析は適切ではないので、分析の対象としない。

- 10 各テストは以下の構成員で草案を作成した。

聴解：金庭久美子非常勤講師、村澤慶昭非常勤講師、奥野由紀子、文法：清水知子非常勤講師、ヨフコバ四位エレオノラ非常勤講師、丸山千歌、読解：小川蒼子美教授、田代ひとみ非常勤講師、嶽肩志江非常勤講師、漢字・語彙：加藤紀子非常勤講師、白鳥智美非常勤講師、四方田千恵

- 11 シラバスの詳細は横浜国立大学『平成19年度教養教育講義要目』2007.4を参照のこと。

- 12 学部留学生のほか、短期交換留学生や研究生も日本語中級クラスを受講することが可能である。

- 13 外国人留学生は日本語および日本事情科目を外国語単位に代替することが認められているが、その規定は学部によって異なる。詳細は横浜国立大学『平成19年度教養教育履修案内』2007.4、参照のこと。

- 14 経営学部では新カリキュラムにおける「日本語中級」のみならず、旧カリキュラムにおいても「日本語Ⅱ」2単位（国際経営学科は4単位）の履修を義務付けていたため、日本語科目の開設時間においては特に緊密に連絡を取り合う必要があった。

- 15 教養教育科目開設時間帯とは「各学部の専門教育の時間割設定に当たっては、この時間帯に少なくとも必修の授業を設定しないこととし、学生の教養教育の履修に十分配慮する」ことを目的に1996年度教養教育運営委員会で設定させたものである。2007年度は「日本語中級」6科目のうち、A、D、F3科目をこの時間帯に開設した。各科目の学部生受講者は平均4.8名であったが、実際には短期交換留学生・研究生も受講している。

- 16 学部留学生が大学院留学生に比べて精神的な不安を訴える割合が高い、という生活指導上の報告（藤井・門倉2004）もなされており、留学生生活へ適応を図る上で、年齢は重要なファクターであると考えられる。

- 17 面談は学期中になされたため、成績はまだ出ておらず自分で記入させる形式とした。

- 18 これらの記述は担当者の観察および学生との面談から得られた感想に基づくものである。「日本語中級」2007年度担当は金庭久美子非常勤講師、清水知子非常勤講師および奥野、四方田であった。本稿執筆におい

---

でも金庭、清水両講師には多大なるご協力をいただいた。特にここに記して謝意とする。

19. 大学設置基準による規定によると、一単位の授業科目は45時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、授業の方法に応じ、当該授業による教育効果、授業時間外に必要な学修等を考慮するものと定められている。授業自体は1.5時間の15回で22.5時間となり、後の半分22.5時間は授業外学習に費やされるべきものであり、中級日本語に限らず、今後授業外学習の支援方法は急務であると言えよう。

# **A Report on the Placement Test and Intermediate Level Japanese Classes**

OKUNO Yukiko, MARUYAMA Chika, YOMOTA Chie

Key words: Undergraduate international students, Japanese Placement Test for all first year International students, Japanese classes as for intermediate level, Academic advising

From 2003, the International Student Center has been developing new General Education

Japanese classes and Placement tests accompanying them, in an effort to develop the

Japanese language curriculum for international students (Ogawa · Maruyama2006),

(Ogawa · Maruyama · Okuno2004, 2006 ). This year marks the fifth year of this project.

This report will examine the following:

1. Summary of Placement Test, results, analysis and revision.
2. Summary of 2007 academic year Japanese classes for intermediate level.
3. Results of Retest for students who taking intermediate level Japanese classes.
4. Suggestions for improving intermediate level Japanese classes.
5. Accomplishments and future goals.